

原 著

児童館を利用する保護者の利用者評価 —子育て不安, 子ども虐待, 利用頻度, 児童館整備, 相談支援との関連を中心に—

八重樫牧子^{*1} 井上信次^{*2} 直島克樹^{*3} 三好年江^{*4} 泉宗孝^{*2}

要 約

本研究の目的は, A市とB市の児童館を利用している保護者(480人)の利用者評価に関する質問紙調査から, 子育て状況(子育て不安や子ども虐待など)や児童館利用状況(利用頻度, 児童館整備, 相談支援など)と利用者評価の関連を検討することによって, 利用者評価に与える要因について明らかにすることである。2022年9月~10月に郵送法による質問紙調査を実施した。その結果, 困難感の高い人は, 子どもをたたくことや子どもを怒鳴ることが多いこと, 児童館の満足度の高い人は孤立感やストレスが低いことがわかった。児童館設備が良いと思っており, 児童館職員に相談をし, 児童館をよく利用する人は, 満足度や利用者評価が高いことが明らかになった。困難感やB市の方がA市より高く, 児童館の利用頻度や利用者評価数はA市の方がB市よりも高いなど, 地域差があった。したがって, 今後, 地域の特性を踏まえ, 児童館の整備と相談支援などのソーシャルワークの充実を図っていく必要がある。

1. 緒言

核家族化, 地域関係の希薄化, 少子化そして共働き家庭の一般化などの子どもの育ちや子育てをめぐる環境の変化により, 子育てに孤立感や子育て不安などを感じる人が増えており, 地域における子育て支援の充実を図っていくことが求められている。

2023(令和5)年4月には「こども基本法」が施行され, 子どもの視点に立って子どもの権利と福祉を守り, 子どものある家庭における子育てを支援し, 子ども政策を強力に推進する国の機関である「こども家庭庁」もスタートした。同年12月22日には, 「こども基本法」に基づき, 「こども大綱」¹⁾や「こどもの居場所づくりに関する指針」²⁾が閣議決定された。

児童館は, 児童福祉法成立以来, すべての子どもの育ち(健全育成)を保障し, 子育て家庭を支援してきた。今後も, 児童館は地域の子育ち・子育て支援の居場所の一つとして重要な役割が期待されてい

る。2018年10月に改正された「児童館ガイドライン」³⁾には, 児童館の目的は「18歳未満のすべての子どもを対象に, 地域における遊び及び生活の援助と子育て支援を行い, 子どもの心身を育成し情操を豊かにすること」と規定されている。児童館の機能・役割の一つとして「子育て家庭への支援」が挙げられ, 児童館における子育て支援は「子育て家庭に対する相談・支援を行い, 子育ての交流の場を提供し, 地域における子育て家庭を支援すること」と述べられている。八重樫⁴⁾は, 児童館の子育て支援の評価や課題について以下のように指摘している。児童館の子育て支援は保護者(特に母親)の子育て不安を軽減し, ウェルビーイングを高めることを目的としている。そこで, 児童館の子育て支援を評価するためには, 子育て不安と保護者の利用者評価の関連性や児童館の子育て支援の利用状況と児童館に対する評価(満足度)の関連性に関する実証的な調査研究

*1 福山市立大学 名誉教授

*2 新見公立大学 健康科学部 地域福祉学科

*3 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

*4 就実短期大学 幼児教育学科

(連絡先) 八重樫牧子 〒700-0080 岡山市北区津島福居1-9-20-1

E-mail: hamanami@po8.oninet.ne.jp

が必要である。さらに、その研究結果を踏まえた上で、児童館の子育て支援の実践プログラムを開発し、マニュアルを作成することが課題となってくる。

児童館を利用する保護者を対象に児童館の利用者評価と子育て不安の関連性を検討した調査研究はほとんどない。八重樫ら⁵⁾は、A市・B市・C市の3市の児童館の子育て支援活動に参加している保護者（母親）627人を対象に子育て支援活動の実態とその活動効果に関する質問紙調査を実施した結果、児童館利用状況の良い人ほど児童館活動効果が高く、子育て不安も低くなることを明らかにしている。この質問紙調査が実施されてから、すでに15年が経過している。

そこで、本稿では、A市とB市の児童館を利用している保護者を対象に、15年前に八重樫らが実施した質問紙調査⁵⁾（以下、15年前の児童館調査）とほぼ同様の質問紙調査を実施し、子育て状況（子育て不安や子ども虐待）や児童館利用状況（利用頻度、児童館整備、相談支援など）と利用者評価との関連性を検討し、利用者評価に影響を与える要因について明らかにする。

2. 方法

2.1 調査の対象・方法・期間

調査対象は、A市の児童館を利用している保護者925人、B市の児童館を利用している保護者565人、合計1,490人である。487人の回答を得たが、祖父母6人と非協力と回答した1人を除く480人を有効回答とした。有効回答数は、A市284人（有効回答率30.7%）、B市194人（有効回答率34.3%）、合計480人（有効回答率32.2%）である。なお、A市には23か所の児童館・児童センター、B市には6か所の児童館・児童センターがある。調査期間は2022年9月～10月、調査方法は郵送法による質問紙調査である。

2.2 調査内容

調査内容は以下の通りである。①対象者の属性に関する項目は、子どもとの続柄、よく利用している児童館、年齢、子どもの人数や年齢、婚姻状況、家族形態、居住形態、居住年数、就労状況、最終学歴、家計状況の12項目である。家計状況については「1.黒字であり毎月貯金をしている」「2.黒字であるが貯金はしていない」「3.黒字でも赤字でもなくぎりぎりである」「4.赤字であり貯金をとりくずしている」「5.赤字であり借金をしている」を「苦しい」の順序尺度に修正した。②子育て状況は、子育ての知識・情報、子育てサポート（3項目）、子育て不安（15項目）、子ども虐待意識・子ども虐待経験・被虐待経験（7項目）の25項目で

ある。子育てサポートと子育て不安の項目は「よくある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の順序尺度を用いた。子ども虐待意識の項目は「積極的にすべきである」「必要に応じてすべきである」「他に手段がないと思った時にすべきである」「決してすべきではない」の順序尺度、子ども虐待経験・被虐待経験の項目は「日常的にあった」「時々あった」「1-2回あった」「全くなかった」の順序尺度を用いた。子育て不安の項目は、八重樫ら⁵⁾が使用した子育て不安に関する15項目を使用した。子ども虐待意識・子ども虐待経験・被虐待経験に関する項目は、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの「子どもに対するしつけのための意識・実態調査結果報告書」⁶⁾を参考に抽出した7項目である。③児童館の利用状況と利用者評価については、利用状況（利用年数、利用頻度、利用のきっかけ、利用理由、職員への相談状況など10項目）、利用者評価（子どもについての評価：7項目、自分自身についての評価：9項目、地域とのかかわりについての評価：5項目 計21項目）、満足度などの32項目である。児童館の利用頻度の項目は「1.1週間3-4回程度」「2.1週間1-2回程度」「3.2週間1回程度」「4.1月に1回以下」の順序尺度、職員への相談状況と利用者評価の項目は「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の順序尺度を用いた。満足度は「0」（全く満足していない）から「10」（十分に満足している）の数字を1つ選択することとした。利用者評価の項目は、八重樫ら⁵⁾が使用した利用者評価に関する21項目を用いた^{†1)}。親子の居場所に関する自由記述と合わせると本調査質問項目は合計70項目である。

2.3 分析方法

各質問項目の基礎集計を行った（IBM SPSS version29使用）。子育て不安項目については因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。「よくある」に4点、「時々ある」に3点、「ほとんどない」に2点、「全くない」に1点を付置した。逆転項目については、「よくある」に1点、「時々ある」に2点、「ほとんどない」に3点、「全くない」に4点を付置し、各因子の下位尺度得点の平均得点を算出した。利用者評価項目については、「よくある」に4点、「時々ある」に3点、「ほとんどない」に2点、「全くない」に1点を付置し、子ども、自分自身、地域のかかわり別に平均得点を算出した。各項目についてシャピロ・ウィルク検定を行った結果、いずれも正規分布をしていなかった。ので、地域差などを比較するために、クロス集計によるカイ2乗検定（残差分析）、Mann-Whitney 検定、Kruskal-Wallis 検定を行った。有意差検定は少数の対象者の分析が可能な IBM SPSS version29 Exact

を用いて Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定を行った。子ども虐待経験と子育て不安と利用者評価の関連性の検討するためにスピアマンの順位相関係数を算出した。満足度を従属変数、児童館設備・相談状況・子育て不安・利用者評価を独立変数とする重回帰分析^{†2)}を行った。

3. 結果

3.1 対象者の主な属性

分析対象者は母親463人(96.5%), 父親17人(3.5%)の合計480人であった。対象者の平均年齢(±標準偏差)は、母親36.2(±5.6)歳、父親36.6(±4.7)歳、全体36.3(±5.6)歳であった。地域別に見ると A 市35.1(±0.3)歳、B 市38.0(±0.4)歳であり、Mann-Whitney 検定の結果、B 市の年齢が高くなっていた($U=18013.5$, $p<0.001$)。子どもの平均人数(±標準偏差)は1.8(±0.8)人であった。家族形態については、核家族が90.4%, 三世代家族が8.2%, ひとり親家庭が1.5%であった。地域差はな

かった。居住形態については、一戸建てが63.4%と多く、B 市(70.3%)は A 市(58.7%)に比べ多くなっていた($p<0.05$)。居住年数は、1~3年未満、5~10年未満が多く、B 市の居住年数が長くなっていた($p<0.001$)。就労状況は、就労無が48.2%であったが、B 市(54.9%)の方が A 市(43.6%)と比べ多かった。産休・育休中は A 市(28.0%)が B 市(11.9%)より多くなっていた($p<0.001$)。最終学歴は、4年制大学卒が51.1%と約半数を占めていたが、A 市(55.2%)が B 市(45.1%)に比べ多かった($p<0.05$)。家計状況は、「余裕あり」が56.6%であったが、「苦しい」が4.9%と答えていることに留意したい。地域差はなかった。

3.2 子育て状況

3.2.1 子育て不安

子育て不安の因子分析(最尤法、プロマックス回転、因子数は固有値1以上を基準)を行った結果、3因子を抽出した。KMO の測度は0.840、バートレットの球面性検定では $p<0.001$ で、因子分析を行う妥

表1 子育て不安の因子分析

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
	孤立感	ストレス	困難感	
孤独	0.987	-0.125	-0.082	0.783
自分一人	0.556	-0.028	0.115	0.374
眠れない	0.478	0.040	-0.001	0.250
がまんばかり	0.396	0.156	0.132	0.336
繰り返し	0.394	0.015	0.159	0.257
両立困難	0.305	0.197	0.179	0.313
リラックス(逆転項目)	0.068	0.768	-0.159	0.580
楽しいこと(逆転項目)	0.210	0.522	-0.103	0.384
ゆとり(逆転項目)	-0.126	0.516	0.200	0.295
目覚めさわやか(逆転項目)	-0.117	0.395	0.132	0.156
イライラ	-0.040	0.056	0.580	0.580
どうしたらいいのか	0.186	-0.098	0.508	0.352
考え事おっくう	0.134	0.076	0.419	0.294
固有値	4.025	1.395	1.096	
寄与率	25.803	6.232	4.201	
累積寄与率	25.803	32.035	36.236	
Cronbach のアルファ	0.760	0.566	0.584	
因子相関行列	第1因子	第2因子	第3因子	
第1因子	1.000	0.535	0.549	
第2因子		1.000	0.344	
第3因子			1.000	

1) 因子抽出法: 最尤法

2) 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

3) 削除項目: うまい子育て, 外出心配の2項目

4) 第1位「よくある」に4点, 第2位「時々ある」に3点, 第3位「ほとんどない」に2点, 第4位「全くない」に1点を付置した。逆転項目については, 第1位「よくある」に1点, 第2位「時々ある」に2点, 第3位「ほとんどない」に3点, 第4位「全くない」に1点を付置した。

5) KMO の標本妥当性の測度: 0.840, Bartlett の球面性検定: $p<0.001$

当性を確認できた。解析の結果、第1因子は「孤立感」、第2因子は「ストレス」、第3因子は「困難感」と命名した(表1)。

表2からわかるように、子育て不安の各因子の下位尺度得点について地域別にみると、困難感についてはB市の方が高くなっていた($p<0.05$)。就労状況別では、孤立感については自営より産休・育休中や就労無が高く($p<0.05$)、困難感は産休・育休中より就労無が高くなっていた($p<0.01$)。家計状況別では、全ての子育て不安について、余裕ありより普通や苦しいと答えた人の方が高くなっていた(孤立感: $p<0.001$, ストレス: $p<0.001$, 困難感: $p<0.01$)。

3.2.2 子ども虐待経験・被虐待経験・子ども虐待意識

被虐待経験(子どもの頃の虐待経験)については、子どもの頃「たたかれた」経験は「全くなかった」

が39.7%と多くなっていた。子どもの頃「怒鳴られた」経験は「時々あった」が46.1%と多く、「全くなかった」は18.6%であった。過去3ヶ月に「子どもをたたいた」経験は「全くなかった」が64.5%、「子どもを怒鳴った」経験は30.1%であった。「子どもを怒鳴った」経験については地域差があり、「時々あった」がA市(25.3%)よりB市(37.0%)の方が多くなっていた($p<0.05$)。子ども虐待意識については、「体罰」を「決してすべきではない」が89.7%、「たたく」についても62.9%と多くなっていた。「怒鳴る」については「他に手段がないと思った時のみすべき」が44.0%。「決してすべきではない」が37.6%であった。「体罰」や「たたく」ことを否定する意識は高かった。地域差はなかった。

表3からわかるように、「子どもの頃たたかれた」と「子どもの頃怒鳴られた」の相関係数は $\rho=0.652^{**}$

表2 属性からみた子育て不安の各因子の下位尺度得点

	地域	家族形態	就労状況	家計状況
第1因子孤立感	$p=0.891$	$p=0.980$	$p=0.015$ 自営<産休・育休中 自営<就労無	$p=0.000$ 余裕あり<苦しい 余裕あり<普通
第2因子ストレス	$p=0.341$	$p=0.693$	$p=0.083$	$p=0.000$ 余裕あり<苦しい 余裕あり<普通
第3因子困難感	$p=0.045$ A市<B市	$p=0.758$	$p=0.003$ 産休・育休中<就労無	$p=0.003$ 余裕あり<苦しい 余裕あり<普通

地域: Mann-WhitneyのUの検定

家族形態・就労状況・家計状況: Kruskal-Wallisの検定

有意差のあるものについては、ペア毎の比較を行い Bonferroni訂正により調整済み有意確率を算出し、多重比較を行った。

表3 子ども虐待経験・被虐待経験・子ども虐待意識と子育て不安と利用者評価の関連

			虐待経験				子ども虐待意識			子育て不安			利用者評価			
			現在 (子ども虐待経験)		子どもの頃 (被虐待経験)		体罰	たたく	怒鳴る	第1因子 孤立感	第2因子 ストレス	第3因子 困難感	満足度	子ども 平均評価	自分 平均評価	地域 のかわり 平均評価
			子どもを たたいた 怒鳴った	子どもを たたいた 怒鳴った	たたか れた	怒鳴ら れた										
虐待 経験	現在 (子ども 虐待経験)	子どもをたたいた 子どもを怒鳴った	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	子どもの頃 (被虐待経験)	たたかれた 怒鳴られた	.341**	.229**	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
子ども 虐待意識	体罰	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	たたく	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	怒鳴る	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
子育て不安	第1因子孤立感	.096*	0.087	.129**	.151**	0.020	-0.059	-0.095	---	---	---	---	---	---	---	---
	第2因子ストレス	.115*	.095*	.115*	0.086	-0.033	-0.073	-0.091	---	---	---	---	---	---	---	---
	第3因子困難感	.296**	.357**	.162**	.122*	-0.057	-.118*	-.159**	---	---	---	---	---	---	---	---
利用者評価	満足度	0.019	0.077	-0.076	-.129**	0.040	0.056	0.081	---	-.211**	-.203**	-0.026	---	---	---	---
	子ども平均評価	.103*	.161**	-0.047	-0.010	-0.019	-0.059	0.002	-0.083	-.176**	0.008	---	---	---	---	---
	自分平均評価	-0.063	-0.058	-.123*	-0.101	0.051	0.009	0.069	-0.081	-.152**	-0.039	---	---	---	---	---
	地域のかかわり平均評価	-0.045	-0.022	-0.012	-0.024	-0.015	0.021	-0.031	-.110*	-.190**	-.113*	---	---	---	---	---

Spearmanのロー, **: 相関係数は1%水準で有意(両側), *: 相関係数は5%水準で有意(両側)

±0.2~±0.04: 弱い相関がある ±.40~±.70: 比較的強い相関がある ±.70~±1.00: 強い相関がある

で強いが認められた。「子どもをたたいた」と「子どもを怒鳴った」の相関係数は $\rho=0.561^{**}$ で比較的強いが認められた。「子どもの頃たたかれた」と「子どもをたたいた」、「子どもの頃怒鳴られた」と「子どもを怒鳴った」の関連性いわゆる子ども虐待の世代間連鎖については、前者が $\rho=0.341^{**}$ 、後者が $\rho=0.266^{**}$ で、弱い相関があった。子ども虐待意識については、「子どもをたたく」と「子どもを怒鳴る」の相関係数は、 $\rho=0.576^{**}$ で比較的強いが認められた。子育て不安と子ども虐待については、困難感「子どもをたたいた」($\rho=0.296^{**}$)と正の弱い相関があり、「子どもを怒鳴った」($\rho=0.357^{**}$)と正の比較的強い相関があった。

3.3 児童館利用状況

児童館の利用頻度については、1週間に1-2回程度利用する人が38.6%と多く、1月に1回以下が23.7%、2週間に1回程度が23.4%、そして1週間に3-4回程度が14.3%であった。地域別にみると、1週間3-4回以上利用する人はB市の9.6%に比べA市は17.4%と多くなっていた。また、1月に1回以下はB市が34.3%であるのに対しA市は16.7%であることから($p<0.001$)、A市の利用頻度が多いといえる。

児童館の設備については、「よく整備されている」が53.8%、「だいたい整備されている」が43.5%であった。地域差はなかった。児童館職員には36.8%の人が相談をすると回答していた。しかし、「ほとんどない」(38.1%)や「全くない」(25.1%)と相談していない人も多かった。地域差はなかった。相談内容は、「子育て不安・悩み」(30.6%)「遊びに関するこ

と」(25.2%)が多くなっていた。

3.4 児童館利用者評価

表4示すように地域別の児童館の利用者評価については、満足度の中央値は9.0と高くなっていた。地域差はなかった。子どもの平均評価得点は、B市(3.14)に比べA市(3.43)の方が高くなっていた($p<0.05$)。自分自身の平均評価得点も、B市(3.15)に比べA市(3.30)の方が高かった($p<0.01$)。地域のかかわり平均評価得点の地域差はなかった。

児童館の利用頻度と満足度、子ども・自分自身・地域のかかわりへの評価の関連性については、表5に示すように、満足度や子ども・自分自身の平均評価得点は、利用頻度が多いほど高くなっていた($p<0.001$)。地域のかかわり平均評価得点については利用頻度とは関連がなかった。

児童館設備の状況と利用者評価の関連性については、表4からわかるように満足度、子ども・自分自身・地域のかかわりへの評価のいずれも、児童館がよく整備されていると回答した人の評価が高くなっていた(満足度・子どもの平均評価得点: $p<0.001$ 、自分自身の平均評価得点: $p<0.05$ 、地域のかかわり平均評価得点: $p<0.01$)。児童館職員への相談状況と利用者評価については、満足度や子ども・自分自身の平均評価得点は相談がある方が0.1%水準で、地域のかかわり平均評価得点は1%水準で、相談がある方が評価も高かった(表5)。

表3からわかるように、子育て不安と満足度の関連性については、孤立感と満足度の相関は $\rho=-0.211^{**}$ 、ストレスと満足度の相関は $\rho=-0.203^{**}$

表4 地域別・児童館設備からみた利用者評価

利用者評価			度数	平均 ランク	順位和	中央値	Mann- Whitney のU	漸近有意 確率 (両側)
地域	満足度	A市	280	239.40	67033.00	9.00	26067	0.563
		B市	192	232.27	44595.00	9.00		
		合計	472			9.00		
	子どもの 平均評価得点	A市	245	222.68	54555.50	3.43	18699.5	0.020
		B市	176	194.75	34275.50	3.14		
		合計	421			3.29		
	自分自身の 平均評価得点	A市	244	223.33	54493.00	3.22	18341.0	0.011
		B市	176	192.71	33917.00	3.11		
		合計	420			3.22		
	地域のかかわり 平均評価得点	A市	254	225.25	57214.50	2.80	21906.5	0.260
		B市	184	211.56	38926.50	2.60		
		合計	438			2.80		
児童館設備	満足度	よく整備されている	254	280.90	71348.00	10.00	12853.00	0.000
		だいたい整備されている	204	165.50	33763.00	8.00		
		合計	458			9.00		
	子どもの 平均評価得点	よく整備されている	228	221.41	50481.50	3.43	16436.50	0.001
		だいたい整備されている	179	181.82	32546.50	3.14		
		合計	407			3.29		
	自分の 平均評価得点	よく整備されている	230	215.75	49622.00	3.22	17653.00	0.021
		だいたい整備されている	177	188.73	33406.00	3.11		
		合計	407			3.22		
	地域のかかわり 平均評価得点	よく整備されている	239	225.44	53881.00	2.80	19014.00	0.013
		だいたい整備されている	185	195.78	36219.00	2.60		
		合計	424			2.80		

表5 児童館利用頻度・相談状況からみた利用者評価

利用者評価			度数	平均 ランク	中央値	Kruskal- Wallis のH(K)	漸近有意 確率	Bonferroni 訂正 によるペアごとの 比較
利用 頻度	満足度	①1週間3-4回以上	64	247.63	9.00	18.911	0.000	①・②>④
		②1週間1-2回程度	172	243.63	9.00			
		③2週間1回程度	103	202.84	8.00			
		④1月に1回以下	103	186.96	8.00			
		合計	442	9.00	9.00			
	子どもの 平均評価得点	①1週間3-4回以上	60	255.73	3.57	41.287	0.000	①・②>③・④
		②1週間1-2回程度	153	223.08	3.43			
		③2週間1回程度	92	166.51	3.14			
		④1月に1回以下	93	157.08	3.00			
		合計	398	3.29	3.29			
	自分自身の 平均評価得点	①1週間3-4回以上	56	237.13	3.44	30.788	0.000	①・②>④
		②1週間1-2回程度	153	222.47	3.33			
		③2週間1回程度	95	186.68	3.00			
		④1月に1回以下	93	150.01	3.00			
		合計	397	3.22	3.22			
	地域のかかわり 平均評価得点	①1週間3-4回以上	60	229.36	2.80	6.328	0.097	
		②1週間1-2回程度	160	215.77	2.80			
		③2週間1回程度	96	193.89	2.60			
		④1月に1回以下	96	189.39	2.60			
		合計	412	2.80	2.80			
相談 状況	満足度	①ある	175	270.34	9.00	22.493	0.000	①>②・③
		②ほとんどない	179	227.22	8.00			
		③全くない	117	198.08	8.00			
		合計	471	9.00	9.00			
	子どもの 平均評価得点	①ある	160	240.57	3.50	22.964	0.000	①>②>③
		②ほとんどない	158	207.92	3.29			
		③全くない	102	167.33	3.00			
		合計	420	3.29	3.29			
	自分自身の 平均評価得点	①ある	160	264.94	3.44	84.873	0.000	①>②>③
		②ほとんどない	158	209.64	3.22			
		③全くない	101	123.52	2.78			
		合計	419	3.22	3.22			
	地域のかかわり 平均評価得点	①ある	168	241.19	2.80	12.207	0.002	①>③
		②ほとんどない	169	216.37	2.80			
		③全くない	100	186.16	2.40			
		合計	437	2.80	2.80			

表6 満足度に影響を与える要因

	非標準化係数			標準化 係数 ベータ	t 値	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差					許容度	VIF
(定数)	8.538	0.785			10.876	0.000		
利用頻度	-0.115	0.065	-0.087	-1.780	0.076	0.857	1.166	
児童館設備	-0.906	0.123	-0.342	-7.361	0.000	0.947	1.056	
相談状況	-0.243	0.090	-0.144	-2.691	0.008	0.718	1.392	
第1因子孤立感	-0.178	0.126	-0.079	-1.413	0.159	0.664	1.507	
第2因子ストレス	-0.184	0.114	-0.081	-1.616	0.107	0.811	1.232	
第3因子困難感	0.100	0.123	0.043	0.813	0.417	0.741	1.349	
子ども平均評価	0.527	0.154	0.199	3.418	0.001	0.605	1.654	
自分自身平均評価	0.112	0.158	0.043	0.708	0.480	0.561	1.784	
地域のかかわり平均評価	0.265	0.085	0.159	3.124	0.002	0.787	1.270	

従属変数: 満足度 ANOVA $p < 0.001$; $R = 0.617$, R^2 乗 = 0.381, 調整済み R^2 乗 = 0.362

利用頻度 1: 1週間3-4回以上, 2: 1週間1-2回程度, 3: 2週間1回程度, 4: 1月に1回以下

児童館設備 1: よく整備されている, 2: だいたい整備されている

相談状況 1: ある, 2: ほとんどない, 3: 全くない

と負の弱い相関がみられた。子育て不安と利用者評価については、ストレスと子どもの平均評価得点の相関は $\rho = -0.176^{**}$ 、地域のかかわり平均評価得点の相関は $\rho = -0.190^{**}$ であり、負の低い相関が認められた。

子育て不安や児童館利用状況や評価を独立変数、満足度を従属変数とする重回帰分析を行った結果、児童館設備がよく整備され、児童館職員に相談し、子どもや地域のかかわり平均評価得点が高いことが満足度に影響を与えていることが明らかになった(表6)。

4. 考察

4.1 子育て状況(子育て不安や子ども虐待意識・経験)―子どもを怒鳴らない子育て方法や治療的プログラムにつなげることの重要性

子どもに体罰を「決してすべきではない」と答えた人については、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの調査⁶⁾(以下、チルドレン調査)では43.3%であったが、本調査では89.7%と多くなっていた。子どもをたたくことについても同様に「決してすべきでない」と答えた人は、チルドレン調査(40.0%)より、本調査(62.9%)方が多くなっていた。子どもを怒鳴ることについては、チルドレン調査(41.8%)と本調査(37.6%)はほぼ同じで子どもをたたくことに比べて少なくなっていた。また、子どもをたたいた経験について「全くなかった」と答えた人は、チルドレン調査では29.9%であったが、本調査では64.5%と多くなっていた。子どもを怒鳴った経験について「全くなかった」と答えた人は、チルドレン調査の43.0%であり、本調査では30.1%とやや少なくなっていた。以上のように、本調査では、体罰や子どもをたたくことを否定する意識は高く、子どもをたたいた経験のない人も多くなっていた。しかし、子どもを怒鳴ることを否定する意識は、体罰や子どもをたたくことに比べると低く、実際に子どもを怒鳴った経験のある人も多いことがわかった。

子育てに困難感のある人は子どもをたたいたり($\rho = 0.296^{**}$)、子どもを怒鳴ったりすること($\rho = 0.357^{**}$)が明らかになった。2019年に八重樫が実施した岡山市の就学前親子の居場所に関する調査⁷⁾では、子どもをたたいたり、怒鳴ったりする人ほど「孤立感」「ストレス感」「困難感」が高くなっており、困難感は同様の結果になった。

2019年6月に児童福祉法等の改正法が成立し、親権者等は児童のしつけに際して体罰を加えてはならないことが法定化され、2020年4月から施行されている。さらに2022年12月に民法が改正され、親権者

による懲戒権の規定(改正前民法822条)が削除され、2024年4月から施行されている。子どもをたたくことや怒鳴ることは体罰であること、しつけとして体罰を用いない子育て方法を児童館などの親子の居場所では保護者に伝えていくことが重要になってきている。特に、A市よりB市の児童館を利用している人、就労をしていない人、家計状況に余裕のない人は子育てに困難感を感じているので、子どもを怒鳴らない子育て方法を具体的に伝えていくことが必要である。

また、子ども虐待の世代間連鎖については、子どもをたたくは $\rho = 0.341^{**}$ 、子どもを怒鳴るは $\rho = 0.266^{**}$ の相関があった。ただし、森田⁸⁾が指摘しているように、子ども虐待を受けた約7割の人は、被虐待経験の苦悩に共感し、理解し、寄り添って話を聴いてくれる人がいれば連鎖しないといことに留意しなければならない。児童館職員は被虐待経験のある人をアウトリーチし、寄り添っていくとともに、世代間連鎖が起きている人に対しては専門的な治療プログラムにつなげていくことが必要である。

4.2 子育て不安・児童館利用頻度・利用者評価の関連―地域の特性を踏まえた児童館設備の整備と相談支援の重要性

児童館利用について満足度の高い人は、孤立感($\rho = -0.211^{**}$)やストレス($\rho = -0.203^{**}$)が低くなっていた。また、子どもや地域のかかわり平均評価得点が高い人もストレスが低くなっていた(子ども： $\rho = -0.176^{**}$ 、地域のかかわり： $\rho = -0.190^{**}$)。15年前の児童館調査⁵⁾では、児童館活動評価が高い人は子育て不安得点が低くなっていた。本研究でも満足度やストレスについては同様の結果になった。

児童館利用頻度と利用者評価の関連性については、児童館をよく利用する人ほど満足度や、子どもや自分自身の平均評価得点が高くなっていた。また、15年前の児童館調査⁵⁾と同様に、児童館設備が整っていると思っている人は満足度や子ども・自分自身の平均評価得点が高くなっており、児童館職員に相談する人ほど、満足度や子ども・自分自身・地域のかかわり平均評価得点が高くなっていた。児童館の満足度には、児童館設備がよく整備されていること、児童館職員に相談していること、子どもや地域のかかわりに関する利用者評価が高いことが影響していることが明らかになった。

本調査で対象とした児童館の種類は小型児童館と児童センターである。児童センターは小型児童館の設備を満たした上でさらに体力増進指導ができるよう設備することが規定されている。A市は19の児童館と4つの児童センター、B市は5つ児童館と1つ

の児童センターがあり、A市の方が児童センターは多かったが、児童館設備については地域差はなかった。児童館設備の具体的評価については、自由記述をみると、児童館設備のマイナス評価として「おもちゃが少ない」「衛生状況が悪い」「スペースが狭い」「駐車場がない」などが挙げられていた。一方、プラス評価としては「年齢にあった活動ができる広さや遊具が用意されている」「駐車場が広い」などが挙げられていた。児童館は認可された児童福祉施設なので児童館設備については「児童福祉施設の整備及び運営に関する基準」を満たしていなければならない。しかし、児童館によっては基準以上の整備をしていることもあるので、保護者の評価に違いがみられたと思われる。今後、具体的な児童館設備内容について評価し、児童館設備の充実を図っていくことが必要である。

児童健全育成推進財団⁹⁾は、児童館での子どもからの相談は、生活場面や活動場面において唐突に話し始められ、表情や態度・行動で問題を表出させることもあると述べられている。児童館を利用する保護者の相談支援についても子どもの相談支援と同様に、児童館職員は保護者との日常的なかかわりの中で信頼関係を形成し、ニーズに気づくことが重要になってくる。

本調査から、A市よりB市の児童館を利用している人の困難感が高いことや、B市よりA市の児童館の利用頻度が高く、利用者評価（満足度や利用者子ども・自分自の平均評価得点）も高いことなど地域差が明らかになった。今後、地域の特性を踏まえ、児童館整備と児童館の相談支援などのソーシャルワークの充実を図っていくことが課題である。

倫理的配慮

質問調査用紙に調査協力有無の質問項目を設け、協力すると回答した保護者を本調査に同意を得たものとした。調査は無記名式で実施し、結果の集計はすべて統計的に処理し、個人が特定されることのないよう個人情報の保護を遵守した。本研究に関連して、開示すべきCOIはない。本研究は、新見公立大学研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：255）。

謝 辞

本調査にご回答くださいましたA市とB市の児童館の利用者の皆様、調査の実施にご協力くださいました支援者の皆様に感謝申し上げます。

付 記

令和2年度～令和5年度科研・基盤研究(C)(一般)・課題番号20K02298「地域の児童館の子育ち・子育て支援におけるソーシャルワークに関する実証的研究」(研究代表者：八重樫牧子，研究分担者：井上信次，直島克樹，三好年江，泉宗孝)の研究成果の一部として、2023年11月26日に日本虐待防止学会第29回学術集会滋賀大会(立命館大学びわこキャンパス)において、「児童館を利用する保護者の利用者評価—子ども虐待，子育て不安，利用頻度，相談有無との関連を中心に—」について口頭発表を行った。本論文は、この発表を一部修正加筆したものである。

注

- †1) 2006年2月にA市、B市、C市の児童館を利用している保護者に児童館活動評価等に関する質問紙調査を実施した。児童館活動評価の27項目を検討するために、Mplus (Ver.5) によるカテゴリカル因子分析(プロマックス回転)を行った結果、21項目から4因子を抽出した。第1因子を「子どもとの関わり」、第2因子を「地域との関わり」、第3因子を「自分自身への効果」、第4因子を「子どもへの効果」と命名した。本研究では、第4因子「子どもへの効果」を「子どもの評価」(7項目)とし、第1因子「子どもとの関わり」と第3因子「自分自身への効果」(9項目)を「自分自身の評価」、そして、第2因子「地域との関わり」を「地域のかかわり評価」(5項目)とした。
- †2) 重回帰分析はパラメトリックな手法であり、正規分布に従うデータでなければならない。本研究で、重回帰分析に使用した満足度、子育て不安、利用者評価等は正規分布をしていなかったため、厳密には重回帰分析を行うべきではない。しかし、対馬¹⁰⁾も指摘しているように、ノンパラメトリック回帰分析をプログラムしている統計ソフトは少ない現状であり、その使用例があまり普及していないので、回帰分析に関してはデータの分布を問わずに適用する場合が多い。そこで、本研究では、全体の傾向をみるために重回帰分析を用いて検討を行った。

文 献

- 1) こども家庭庁：こども大綱.
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/f3e5eca9-5081-4bc9-8d64-e7a61d8903d0/276f4f2c/20231222_policies_kodomo-taikou_21.pdf, 2023.
 (2024.2.28確認)
- 2) こども家庭庁：こどもの居場所づくりに関する指針.
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/816b811a-0bb4-4d2a-a3b4-783445c6cca3/9dade72e/20231201_policies_ibasho_09.pdf, 2023. (2024.2.28確認)
- 3) 厚生労働省子ども家庭局長：児童館ガイドラインの改正について（通知）.
<https://www.mhlw.go.jp/content/11906000/000361016.pdf>, 2018. (2024.2.28確認)
- 4) 八重樫牧子：児童館の子育ち・子育て支援—児童館施策の動向と実践評価—. 初版，相川書房，東京，2012.
- 5) 八重樫牧子，小河孝則，田口豊都：地域社会における子育て支援の拠点としての児童館の活動効果に関する研究．
 厚生指標，54(8)，23-32，2007.
- 6) 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン：子どもに対するしつけのための体罰等の意識・実態調査結果報告—子どもの体やこころを傷つける罰のない社会を目指して—. https://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/php_report201802.pdf, 2018. (2022.8.31確認)
- 7) 八重樫牧子：子ども虐待と子育て不安や就学前親子のニーズとの関連性—岡山市の就学前親子の居場所に関する調査より—. 厚生指標，68(12)，18-26，2021.
- 8) 森田ゆり：MY TREE ペアレンツ・プログラムのあらまし．森田ゆり編著，虐待・親にケアを一生きる力を取り戻す MY TREE ペアレンツ・プログラム—. 初版，築地書館，東京，43-57，2018.
- 9) 児童健全育成推進財団：令和3年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書 児童館の運営及び活動内容等の状況に関する調査研究. https://www.kodomo-next.jp/docs/fact-finding-survey/R3_research_report.pdf, 2022. (2024.11.13確認)
- 10) 対馬栄輝：医療系研究論文の読み方・まとめ方—論文のPECOから正しい判断まで—. 初版，東京図書，東京，2010.

(2024年11月29日受理)

User Evaluation of Parents Who Use Children's Centers: Focusing on the Relationship between Child-Rearing Anxiety, Child Abuse, Frequency of Use, Children's Center Facilities, and Social Work

Makiko YAEGASHI, Shinji INOUE, Katsuki NAOSHIMA, Toshie MIYOSHI and Munetaka IZUMI

(Accepted Nov. 29, 2024)

Key words : Children's centers, evaluation of the users, child-rearing anxiety, frequency of use, social work

Abstract

The purpose of this study is to clarify the factors that influence user evaluations by examining the relationship between parenting conditions (parenting anxiety and child abuse) and children's center usage conditions (frequency of use, children's center facilities, consultation support) and user evaluations through a questionnaire survey of parents (480 people) who use children's centers in City A and City B. A questionnaire survey was conducted by mail from September to October 2022. As a result, it was found that parents who felt a high level of difficulty often hit or yell at their children, and parents who were highly satisfied with children's centers had a low sense of isolation and stress. It was revealed that parents who thought the children's center facilities were good, consulted with children's center staff, and frequently used children's centers had high satisfaction and user evaluations. There were regional differences, such as the sense of difficulty was higher in City B than in City A, and the frequency of use and evaluation were higher in City A than in City B. Therefore, in the future, it will be necessary to improve children's centers and enhance social work services such as consultation support based on the characteristics of each region.

Correspondence to : Makiko YAEGASHI

Fukuyama City University

1-9-20-1 Tsushima Fukui, Kita-Ward, Okayama, 700-0080, Japan

E-mail : hamanami@po8.oninet.ne.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.34, No.2, 2025 197 – 206)